

鶴
渡
る

鶴
渡
る

杉
本
苑
子



鶴 渡 る

600円

昭和47年1月15日 初版発行

著 者 すぎもと その こ 杉 本 苑 子

発行者 瀬 川 雄 章

発行所 株式 双 葉 社
会 社

東京都新宿区神楽坂1の8

郵 便 番 号 1 6 2

電話 東京(268)5111(代表)

振 替 東 京 1 1 7 2 9 9

印刷・享有堂印刷所 製本・若林製本工場

落丁・乱丁の場合は本社にてお取替えいたします

0093-500017-7336 © 杉本苑子 1971

目次

濡れ藻の花	3
じじばの記	41
片えくぼ	81
売った恩	121
班女塚	163
女はこわい	201
鶴渡る	241

装帧·扉

掘

文子

濡れ藻の花

喜造はふさぎこんでいた。奥歯が痛むのだ。二年ほど前から時おり疼いていた歯なのだが、とうとう今度は口の中に熱を持ち、歯ぐきまで腫れ出した。たとえムシ歯一本でも、道中で病むのはつらい。食物が摂りにくくなるので、てきめん体力にひびいてくる。

閉口した喜造は、昨夜、石和一泊したさい、旅籠の女中に訊いて宿場でたった一軒という本道の医者をつたね、歯は専門外であろうが、なんとか熱だけでもさげてもらえないものか、と相談した。

「旅のかただね？」

三十がらみの童顔の医者は、踏んづけられた金時の面さながら、いびつにひん曲った喜造の顔を、おもしろそうに眺めて言った。

「いったいあんた、どっちからどっちへ行きなさるね？」

「ろ、ちから、ろ、ちって……」

「つまり東から西へか、西から東へか」

「しもすらから来たんれすよ。えろへ帰るんら」

「だいぶ舌がかったるそうだな」

医者ハクスクス笑った。

「下諏訪から来て江戸へ帰るのだとすると、惜しいことしたよ。きのう甲府の町を通ったわけでしょう。甲府には上手な歯医者があるんだ。いっそ明日、もう一度もどりますかね？」

「いや、おっくうら。もろるにしても、今夜のしのぎがつかねえ。先生、なんとかしてやっておくんらせえ」

「そんなに痛むなら仕方がない。応急の処置だけでもしておいてあげよう。なあに、私だって歯痛ぐらい止められるさ。修めたのは内科だけだね、眼病、骨つぎ、金瘡の治療から、時によりや牛馬の産までこなせなきゃ田舎医者はつとまらないのさ。——口をあけなさい」

つくづくのぞきこんだあげく、薬戸棚へ向きなおって、粉やら液体やら五、六種もの薬をとり出すと、さも仔細らしい手つきで練ったり、混ぜ合せたりしはじめた。

（ふんだくる気だぞ）

内心、喜造はおそれをなした。

「よろしいか。この紙包みのほうは日に三回、一包を一合の水で煎じて服用する。たいていの歯

痛は二包でケロリだ。それからこっち……」

練り薬を、医者はとりあげた。

「これはこうやって、紙に厚く塗って頬の上から貼りつける。熱がとれて腫れがひくよ。はまぐり貝に三日分入れてあげるから、乾いたら取りかえなさい。いいね」

「もち、はなんなんれす？」

「なんだと？」

「もち、は……」

「ものは何なのかと訊いているのか？　ものは、だな。蓮の葉の黒焼きと水仙球すいせんきゅう、それに薄荷はつかの粉末を、丁子ちようじの油で練ったものだよ」

「落っこちれえかしら……」

「そこにぬかりはあるものか。こうして、こうおさえる」

ま新しい晒木綿さらしめんを三寸巾に折りたたんで、医者は喜造の顎の下から両頬へまわし、脳天でギュッと結びつけた。布の余りがとんがって兎の耳のようになった。

「娘っ子にゃ見せられえ面おもてらな」

「ぜいたく言いなさんな。ふくれっ面よりはましだぜ」

喜造はうんざりしたが、薬札を払う段になって、さらに意気銷沈しやうちんしてしまった。請求額はあんのじょう、喜造の肚づもりをたっぷり二倍ほど上廻っていたのだ。

(ちきしうめ、行きずりの旅ガラスだと思って、無慈悲にふんだくりやがる)

とぼしい胴巻の中から、それでもしぶしぶ支払ったのは、練り薬のせいか気のせいか、貼ったとたんに冷ンやりして、痛みが軽くなったように感じたからである。

……薬の、ほんとうの効きめが現われたのは、宿へもどるといなや女中に煎じ薬をつくらせ、それを飲んで寝てしまつてからだつた。

夜中に目がさめてみると痛みは薄らぎ、熱も腫れもだいぶひいていてではないか。

(ありがてえ。薬礼が高えのもわりはねえや)

ひさしぶりに喜造は熟睡し、今朝の飯はお代りまでして食べて、元氣よく石和宿を出発した。一里半ほどで栗原の聚落(しゅうらく)が見えてくる。田安侯の陣屋は近いが、立場(たちば)もない小さな宿駅だ。痛みが遠のくと、げんきんに腹がすいてきた。のども乾きはじめている……。

『名物、あげまんじゅう』の小旗にひかれて、宿はずれの休み茶屋へ彼はのそのそ入って行った。笠も合羽(かっぱ)もそのまま、いちばん隅の床几(とこゝろ)に腰をおろし、寄つて来た小女(こんな)にも、

「まんじゅう一皿」

小声で注文するのは、人目を怖れているためである。旅に出て四年……。この悲しいクセはもはや習性となつて、喜造の挙措に貼りついてしまつていた。

——彼は仇持(かたきもち)ちなのだ。しかも侍につけ狙われていた。遠州、相良(さくら)の生れで年は二十七……。

どこかまのぬけた、軽っぱいその表情が示すとおり、鼻っぱしは強いが芯は臆病な、むしろ好人物の部類に属する男であった。

そんな喜造が、人を、それも両刀たばさんだ武士を殺すなどという大それた事をしでかすに至ったのは、当時、彼の首の根をがっしり掴んで離さなかった二つの悪習——酒と、博打のせいなのである。

殺された相手は潮田内記うしおだないきといって、江戸麴町の番町に屋敷をかまえている七百石あまりの旗本だった。

四十を二つ三つすぎたばかりだが、病弱のため家督を長男の貞之助にゆずって隠居し、もっぱら牡丹作りぼたんをたのしんでいた。

この潮田家に、中間奉公ちゅうかんしていた喜造が、手なぐさみの魅力の中へ屋敷の小者たちをコソコソひきずりこんでいるらしいと知って、内記は立腹した。

ある夜、縁先へ呼びつけ、頭ごなしに不心得をなじったところが、酒をのむと酒乱の癖をおびる喜造が、あいにくこのときも酔っていて、

「なにをッ、一期半期の渡り奉公人に向って主人づらするなんざ、ちゃんちゃおかしいや。きまりの仕事が終ったらあととはてんでんの勝手じゃねえか。花を引こうとサイコロを振ろうと、余計なさしずはうけねえよ」

毒づいたからたまらない。内記はこめかみに青すじを立てて、

「おのれ下郎、言わせておけば……」

まさか本気で斬るつもりでもなかったろうが、部屋の中にとって返すと、床の間の刀掛けに手をのばした。泥草履のままとびあがって、喜造は内記に追いすがった。そして主人の手が、刀にかかるより一瞬はやく、相手をつき倒して彼もまた、刀掛けの脇差しをひつつかんだのだ。

「き、貴様、刃向う気かッ」

もがいて起きあがろうとする胸板へ、抜き身を双手に、身体ごとぶつかった。慢性の胃病で年じゅう不機嫌な、陰気な顔をしているこの主人を、ムシのすかない野郎だと喜造はつねづね憎んでいた。その反感が悪酔いのために誇張され、彼を狂気に駆りたてたのである。

すさまじい絶鳴と返り血の量に、はじめてわれに返り、

（いけねえ、殺っちまった。とんでもねえことになったぞ）

逃げなければ、と思いついたとたん、喜造の身体は目に見えない何かに突きとばされでもしたように、違い棚の手文庫に向って突進していた。日ごろ主人が、当座の入用をここにしまっておくのを、彼は承知していたのであった。

文庫にはカギがかかっていた。横抱きにして庭へ駆けおり、ふだん肥料運びの百姓が出入りする菜園のわきのくぐり戸から往来へとび出した。本所の割り下水でおふろろが仕立物をしながら、ほそぼそ一人ぐらしをたてている。そこへ逃げては足がつく。仕方がないので浅草山の宿で畳屋をしている松吉という友だちの家へころがりこんだ。

事情を聞いて松吉は仰天した。しかし分別せんべつのある男だったから、

「中間ちゅうかんふぜいに父親が殺されたとあっては、公儀の聞こえもうまくなかう。潮田の御当主はおそらく表立ってさわぎやしねえよ。それとなくおれが様子をさぐってくるから、お前は家の中にひっこんでいねえ」

と助言してくれた。

この、松吉の判断どおりだった。潮田家では『隠居内記儀、急病死』ということと幕府の手前をつくろい、葬儀を執行した。

喜造は胸をなでおろした。事は落着した……そう考えたのである。

「冗談じゃねえ。甘え男だな、お前も」

松吉は腹立しげに言った。

「相手は武家だよ。葬式が終わったらこんどは草の根を分けてもお前を探し出して、先代の恨みをはらすんだと屋敷中が息まいてるぜ」

「ほんとか兄貴」

「急先鋒は部屋住みの吉之助って次男だそうだ。表向きは病死だから、正式に仇討ちの許しをうけるわけにゃゆかねえが、どうやらまずお江戸から、吉之助はしらみつぶしに探索しにかかっているというこったぜ」

剣術自慢で、いつもきばったような目つきをし、汗くさい稽古着すがたをひけらしながら、

庭の芝生で空打ちなどやっていた吉之助の、あさぐろい癡猛どうもうそうな短軀を思いうかべ、喜造はがつくりしてしまった。

「だめだ、あんな猪いのししみてえな野郎につけ狙われてると思うだけで、生きてる張りがなくなった。いっそさっぱりと討たれちまいてえ」

「ばかを言うな。三年でも五年でも、逃げられるだけ逃げる。そのうちには吉之助のほうも飽きらあ。根こんくらべだよ」

叩きこわしてみると、文庫の中の金は四十両もあった。うち十両を松吉にあずけ、たまにおふくろを見舞ってやってくれたのんで、喜造は江戸をあとにした。

「これに懲こりて、酒とサイコロは断てよ」

と松吉は言った。念を押されるまでもなかった。匂いをかいただけで鳥肌が立つほど、喜造は酒さけざらいになってしまい、代りに甘いものに手を出すようになっていた。齒を悪くしたのもそのせいかも知れない。

京、大阪を見物し、北陸道にはいつて福井、金沢、中仙道から日光へ廻るなど、はじめは旅もめずらしかったが、二年たち三年たち、四年目もすぎかけてくるとむしろに江戸が恋しくなった。無計画に使い散らしたため、路用の金も尽きかけていたのだ。

（おふくろは達者かな）

いったん里心まごころがつくと、もう矢もタテもたまらなくなった。ちょうど信州の塩尻にいたときだ

ったので、そのまま諏訪道^{みち}を甲府へぬけ、甲州街道をまっすぐ東へ、急ぎはじめた今なのである。

二

揚げまんじゅうはうまかった。またたくまに一皿たいらげ、二皿目を注文しかけた背中へ、
「よく食べるねえ」

声がかかった。喜造はムツとした。

（おれの錢でおれが食うのに、文句があんのか）

ふり返ると、うしろの床几に、二人づれの男女が腰をおろしてい、男のほうが女の食欲へ、からかい半分の微笑を投げていたのであった。「兄さん」と女が呼んでいるところを見ると、二人は兄妹らしい。それはいいが、男の顔に目をとめるといなか、

「プッ」

喜造は洗茶にむせて吹き出してしまった。

（なんてこった。まるでこのおれのつらさを、鏡に写したみてえな野郎じゃねえか）

男も晒木綿を顎から両頬にかけて伸ばし、布の余りを月代^{さきやま}のへんで大きく結んでいたのである。喜造のように笠をかぶっていないから、兎の耳はおっ立ってひどくこっけいだし、人目にも

ついた。

（薬を分けてやろうかな）

と喜造は思った。妹の揚げまんじゅうを、うらやましげな顔つきで眺めているところをみると、ご同様、齒痛にちがいない。

（が、まあ、いいや）

高い金を払ったんだ。こっちだっていつ何どき、ご厄介になるかもしれねえ薬だものな……そんなことを考え考え二皿目をばくついているうちに兄妹は茶店を発^たってゆき、喜造の齒が、また猛烈に痛み出してきた。

彼はあわてた。小女にたのんで薬を煎^くじてもらい、湿布もとりかえてみたが痛みは去らない。かえってつよくなるばかりだ。

（ヤブ医者のへボぐすりめ）

まんじゅうの過食を棚^{たな}にあげて喜造は悪^{わる}たいをついた。

床几を二つ占領してしばらく横になっているうちに、それでも幾分おちついてきた。

（そろそろ出かけようか）

と起き直ったとき、

「ゆるせ」

侍が一人はいって来た。編笠をぬぎ、出入り口に近い床几に腰をおろした横顔を見て、喜造は